

第3回県都デザイン懇話会 会議記録

日 時 平成24年10月22日（月）13：30～16：40

場 所 福井県織協ビル 801会議室

1 あいさつ

- ・東村 福井市長

2 議 事

○県都デザイン戦略ワークショップについて報告

（下川委員）

- ・9月1日、9月8日の2回開催されたワークショップでは、3つのテーマに基づいて、1テーマあたり2グループの計6グループで議論した。専門的な意見よりも、この場所がどんな場所になれば自分は活用するかといった、生活者の視点で考えてもらいたいということを条件とした。
- ・「城址と中央公園でどのようなことがしたいか、自分たちは何ができるか」というテーマで、A、Bの2グループが議論した。総合的には、この界限は「賑わいをもたらす市民の活動の場、歴史的遺構を堪能しながら、ゆったりとした時間を過ごせる場となること」を望んでいた。
- ・C、Dグループは「美しい景観、歩きたくなる街など、県都としてどのような駅前が相応しいか、その実現のために自分たちは何ができるか」というテーマで検討した。特に西口広場周辺は、「シチュエーションに応じて様々な使い方ができる場になること」、周辺の通りは、「通行を目的とするだけでなく、休憩したり楽しめたりする機能が盛り込まれている場となること」を望んでいた。
- ・さらに、豊かな空間形成も意識し、「通りやシンボリックな場所に緑が配され、駐車場も含めた“空地”が生活スタイルの一部となるような緑化された場となること」を望んでいた。また、「通りが歩行者優先になること」を望んでいた。
- ・E、Fグループは、「里山（足羽山）・水辺（足羽川）の自然や愛宕坂・浜町の文化的な空間を利用して、どのようなことをしたいか、自分たちは何ができるか」というテーマで検討した。足羽山については「展望や学習などを通じて、日常的に利用できる場となること」を望んでいた。
- ・足羽川については、基本的に親水空間をイメージし、その空間を、「イベントでの利用や市民の生活スタイルを包含するような、日常的な遊びや学びの場となるこ

と」を望んでいた。また、「足羽川を眺めながら、飲食ができるカフェの設置など、ゆったりとした時間を過ごすなどをイメージしていること」が良くわかった。

- ・今回参加していただいた方々は有志の方々であり、この報告を持ってこの有志の方々に対して、報告の役割を果たしたとは思えないので、何らかの形でご協力していただいた方々にお返しをしていけたら良いと思っている。

○県都デザイン戦略 骨子について

<事務局より説明>

- ・事務局（資料3、4）

<意見交換>

Ⅱ デザインの内容

1. 歴史を受け継ぎ、新たな文化を創造する県都の形成

(1) 歴史を象徴し、人が集まる中心となる「福井城址公園」の整備

(国吉委員)

- ・城の中から公共施設が無くなった際、あまり作りこまないで当面はできるだけオープンなスペースを確保しておく。作りこむかどうかはもう少し先の議論として、お堀端などからお城を感じさせるようなしつらえをどうやってつくっていくかが重要である。
- ・養浩館と城址をつなげるような、周りの都市と一体となった見せ方の工夫も必要である。
- ・養浩館から城址周辺、駅前、足羽山につながる、「歴史・文化の回廊」というコンセプトに対して、歴史的資産をただ残すだけにするのか、これまでにない新しい市民活動、文化活動の場として、歴史資産が生きてくるような使い方をしていくのか、いろんな選択肢がある。そういった議論を今後すべき。
- ・城址から駅につながる軸、城址から商業につながる軸、2つの軸があるが、どちらかを優先するのか。それとも同等に扱うのか。
- ・「歴史・文化の回廊」と称する空間をどうやって感じさせるようにするのかというのが、道の作り方、道の角や角への広場の作り方にも影響する。
- ・現代の都市として、歴史も感じさせながら新しくしていく。とても巧みなデザインを取り入れた、他の都市でもやっていない戦略を取りたい。例えば、通りごとに一部の建物の一角には、歴史と新しいものを両方感じさせるようなギャラリーが組み込まれて、新旧が共存する仕掛けを「歴史・文化の回廊」がつなげていく。県都と

ということで、県下市町のショーケースとしてのつながり方もある。文化についてのショールームになるかもしれない。

- ・お城周辺、お城の中の跡地の今後の作り方、活動する場を魅力的な空間としてどのようにしつらえるか、ということについては、とにかく、相当思い切った提案を作っていく必要がある。それを目標にしていかないと進んでいかない。

(西村座長)

- ・お堀に面して大きな通りがなく、その外側に大きな表の通りがあるため、建物がお堀側に正面を向けていない。北側の歩行者専用道もすごく狭い部分がある。ボードウォークを作ってお堀の中に道を張り出すなど、見事な、歩ける歩道がお堀の外側に巡っていて、そこを正面として建物が建っていくような工夫が必要である。
- ・お堀周りを道が巡るなどうまく工夫し、さらに公園になっていくことにより、お堀側が正面になっていく。そうすると魅力的なお店なども出てくるだろう。

(小浦委員)

- ・福井はほとんどが区画整理しており、点的な資源はあるが、歴史的な町割やまちの空間構成の痕跡があまり残っておらず、まちの歴史が現在の地図や都市空間から読みにくい。
- ・2050年という遠い未来には県庁も移転すると想定されているが、そこに至る時間の中で生活も変わり、高齢化も進み、まちの状況も変わっていく。今から将来につながる取り組みとして、どういうことが出来るか。
- ・例えば、散歩道ができてお堀と石垣が見えるなど、まちの歴史が身近なものとなるような取り組みやまちづくりの動きを知ることができる場所づくりなど、長期ビジョンの実現にむけて今からできる取り組みをつないでいくことが重要。
- ・大きな目標としての歴史の活かし方と、身近な取り組みのなかでの歴史の活かし方といった、2つの面からの戦略がいる。

(五百旗頭委員)

- ・明治時代に福沢諭吉と並ぶ影響力を持つ、福地源一郎という有名なジャーナリストがいた。彼は晩年に「徳川史」という書物を編纂した。これは幕末に生きた明治人の江戸時代についての知識の集大成。
- ・この中で印象的なのは、御三家、御三卿を除けば一番重視されている藩が福井藩だということ。福井はメインの藩としては加賀100万石にはかなわない。しかし様々な悲しい歴史があり、幕府から処分を受けたり、お家騒動があるたびに支藩し、幕府とゆかりのある藩が次々でき、これを全部合わせると加賀100万石を超えることになる。

- ・そもそも開祖の結城秀康は家康の息子でありながら豊臣家との関わりが深く、本来ならば家康の後継者となるべきところが、後を継げなかった人。つまり、福井藩というのは、幕藩体制が持っていた色々な亀裂を一身に引き受けてきた藩としての歴史がある。一乗谷に被った織田軍による略奪や放火、近代になってからも、戦災や震災で傷だらけである。
- ・傷を負っているために、全部の歴史遺産を復元して、古都として復活するというのは非常に難しい。ただ、断片的に残っているものから偲ぶ事はできる。偲ぶときに人の想像力は刺激される。想像力を発動するというのが人の快感。偲ぶまちとしてどうするか。
- ・福井の人達は働きもの。労苦を忍んで働く。なので、二重の「しのぶ文化」を持っているまちということをどうアピールしていくかが重要。
- ・スポット的に残っているところをつなぐルートを決める。例えば路上にペインティングし、どういうルートにするかは数年毎に市民で決める。喧々囂々の話をして、見直して塗り直せばよい。
- ・石垣の周りはとても重要。白日堂々人々を圧倒する天守閣はないかもしれないけど、夕方や夜にはライトがあって、安心して夜の散策ができる。そして古い時代を偲ぶというような、いぶし銀のような整備の仕方もある。

(開発委員)

- ・地域間競争、北陸三県と京都とどう差別化するかということ、短期、長期という時間軸の中に必ず入れていかななくてはいけない。
- ・よそがやっていることは有る程度きちんと踏襲する同質化戦略、差別化できるところは徹底してここぞ福井と打ち出す、未来志向型の差別化戦略。それをいかにするか、戦略として打ち出していく必要がある。

(2) 地域の歴史を実感できる都市空間の形成

(下川委員)

- ・自分たちの趣向だけでなく、近隣との連続性も考慮した民間側の景観づくりを進めるために、景観づくりの具体的な方向性をきちんとつくって、自治会に入って、地区の景観づくりを指導していくことが重要である。
- ・福井市中心付近では、福井城址を生かした順化地区、養浩館庭園や芝原上水は宝永地区とどうつながっていくかが重要となる。
- ・地区住民がまちづくりや景観形成に関わっていくことによって、点しかない資源が線や面に広がっていく。

- ・「歴史・文化の回廊形成」というイメージによって歴史文化をつなぎながらも、地域を巻き込んだテーマ性のある通りの景観形成を実施する必要がある。
- ・福井城址界隈は「城址と堀の歴史」、駅前商店街周辺では歴史をくみ取るとしたら「堀」、浜町界隈は食の文化が根付いており歴史も深いため「食」、呉服町と橋南地区では「北国街道」、宝永地区、養浩館周辺は「芝原上水とお泉水」というテーマで景観づくりをしていくと良いのではないか。
- ・緑が少ないという話もあるので、これらそれぞれのテーマに応じた景観づくりに調和を与えるという目的で、通りに樹木を配置していき、各地区を緑でつないでいくと良いのではないか。
- ・各テーマにあった機能を挿入するための空地の活用も考えたらよい。回廊上の空地に、新たな機能を導入していくことによって、時間を消費できるような場所が形成される。
- ・動的な長距離のルートには観光案内所もしっかり作っていくべき。高野山では寺内全長 6km に渡り宿坊が並び、現在 6 カ所の観光案内所を 10 カ所に増やす予定だそう。人を歩かせようと思ったら、迷わせないことが重要。観光案内所も建物があるだけではなく、近隣に住まわれている方の一角を借りて案内所のような機能を挿入したり、自転車の貸し出しなども考えられる。
- ・回廊のルートを、城址から西口広場へ出て、南通りを通り、城の橋通りに出て、北の庄城址、浜町へつなぐルートとして新しく作った方が良いのではないか。城の橋通りを歩かせることで足羽川の存在を示せて、歴史と自然がここで交わるようなイメージができる。
- ・歴史的建造物というのは当然行政が管理することになるが、活用という面では地域に開放できるかどうか重要な焦点になる。
- ・足羽山の百坂の下にある水道記念館を足羽山の地区の活動の場に開放し、地域の人々の活動拠点とできたらよい。歴史に対する意識が高まり、歴史を生かしたまちづくりの原動力になり、県民、市民の歴史的建造物に対する見方を変えるきっかけにもなる。同時に、行政の歴史的なものに対する考え方や捉え方も、社会実験として建物を地域に開放することで、変化していくのではないか。

(3) 文化を受け継ぎ、育てる県都の実現

(五百旗頭委員)

- ・想像力を育てる基盤が文化なので、文化を受け継ぎ育てるのは非常に重要である。
- ・郊外に比べて駅前の商店街の元気がないため、このエリアをアートの発信源にするということはとても良い方法だと思う。城址や中心のエリアに美術館を持ってくる

というのも良いし、それとタイアップする形で、アートを発信する小さな拠点があちこちにあるような状態に持ち込むことが重要だと思う。

- ・ドーナツ化現象が進んでおり、まちの中心部はすごいスピードで高齢化している。高齢者の方が食材を手に入れるということだけを考えても、魚などの生鮮食品も含めて、福井のいい食材が手に入る場所が中心部にあるということが重要だと思う。もちろんそれは観光資源にもなる。
- ・周辺の市町との文化的な交流という観点が必要ではないか。嶺北一帯には、単体ではナンバー1ではないけれども、非常に深い味わいのある市町が集まっているので、連携を考えるべき。柳田国男の北国紀行では、福井県を訪れた際のことを、嶺北は百千の川が一つになって、三国の河口につながっていると書いている。つまり川の流れからみればみんな一つだということ。このエリアでそれぞれの魅力をつなぎ合わせるということが重要である。
- ・例えば屋台村として、周辺の市町それぞれの個性を代弁している屋台をだして、いい意味での競争をさせる。ここに来れば、嶺北全体をまわる時間がない人もそこで楽しみたい気持ちになり、あるいは周辺市町から来た人も自分たちのまちの屋台が何を出しているか、どれくらい人が集まっているか気になって足を運ぶ。そういう場所になれば、面になる人の流れをつくる場所にもなるのではないか。

(竹内委員)

- ・工芸品など、福井県内には良いものがたくさんあるが、まとまって買える場所がない。駅前で、産地とつながっていて、定期的に品が変わり、産地へと人を引っ張っていくような、イベントもあるような場があるといい。
- ・フェニックスプラザに福井のものを集めた場があるが、品替わりがなく、土日休みでとてもさみしい。
- ・福井へ来て良いものを見て、次回は産地に足をのばそうと思うかもしれないし、住んでいる人も、わざわざ産地までは行けないが、買えるのなら福井のものを買って使いたいと思うのではないか。食と同じで、手軽に買えるというのは、来街者も地元の人でも望んでいるのではないか。

(下川委員)

- ・数年前に研究室で、なぜ駅前に買い物客が来ないのか調査した。その結果、大和田に行く人はショッピング、電気屋、ご飯を食べるといった行動のイメージをしながら行く。駅前はそうではなく、あるブティックに用事があるから行くと分かれた。
- ・つまり、駅前には点を目的として人が集まるが、大和田にはある程度可能性をイメージさせるようなものが併設されていることが、人を集める要因となっているのではないか。消費者のニーズに対応させたものを点在させていくというのは、可能性

として非常に重要だと感じた。

(西村座長)

- ・郊外のショッピングセンターのような、消費者が商品を比べたり、ニーズに対応できるような工夫が、既成の商店街でも必要ではないか。

(小浦委員)

- ・商店街には多彩な店があって、目的が無くても行ける場所だったのが、今は空き店舗や閉まっている店も多くなり行っても楽しくない。商店街の店を持っている人は閉まったままでも困らない。店をしたい人にとっても、買いに来る人にとっても中心市街地が使いやすくなるには、まちのかたちから考える必要がある。
- ・高齢者が多くなっている状況では、高齢者の暮らし方を提案するようなサービスやモノの売り方を開発するところから商店街の新しいあり方が見えるかもしれない。暮らしの文化を生み出すポテンシャルが下がってきている。

(開発委員)

- ・民間にもう少し期待してもよい。まちづくりの方向性を出して刺激してあげること、それに感化された人たちに新しい投資をしようという機運が生まれる。
- ・やる気のある個人やお店を早く見つけて、トライアルを引きつけるような、ビジョンなり、建物なり、デザインなりを提示すれば、動きが生まれてくるはず。
- ・私自身がお店を作ったとき、東京の有名な建築家にやってもらったところ、その周辺にお店を作りたいという若者が増え、毎年1店舗か2店舗お店を作り始めている。そういう動きをつくるのが、行政の役割なのではないか。

(国吉委員)

- ・新しい活動として、アートに取り組んでいる都市はたくさんある。産地としての産業や食文化を組み合わせた独自のアートの展開ができるのではないか。
- ・福井に関係ないアートではなく、産業や工芸品などの展開と連携して発信すべき。例えば他の地域からゲストアーティストを呼んできてコラボレーションして発信するなど、外部の人、地域の人、両方が触発される仕組みを文化の回廊沿いに配置していく、と打ち出していくと、お店も人が集まり、変わっていくのではないか。
- ・全てがいきなり出来るわけではない。軸をつくってみせていくことで、外から来てみたいと興味を起こさせるようになる。横浜などもそういった部分があり、人が来るとお店を出そうかなという人やアーティストがやってくる。
- ・公共施設が抜けたあとは広場でもよいが、10年位暫定的に、イベントやアーティストの活動が行えるような仮設的な仕組みや、電源が完備されているなど、最低限の

工夫をしておく。仮設のものも場合によっては拡張できたりする仕掛けがあったり、福井の真ん中で変化を起こさせる。仮設的な建築の上手い人もおり、建築で人目をつけるということもあるのではないか。

(西村座長)

- ・通りがきれいになって、行政も力が入っているということが分かると、ビジョンを自分の生活のビジョンにも重ねられる。
- ・新栄商店街には可能性がある。全部の店が落ち込んでいるわけではなくて、元気のいい店もある。元気がいい理由をちゃんと見れば可能性は見えてくる。
- ・新栄商店街は、区画整理した福井では唯一迷路性がある面白い空間で、そこに惹かれて来る人もいる。空間の価値をちゃんと見せることが、面白い動きにつながる。
- ・仮設や屋台村をつくるという手もあるし、建物の所有者が志ある人に貸してあげられるような仕組みも必要ではないか。

(五百旗頭委員)

- ・アートは無からつくり、既存の資源を有効利用すべき。
- ・例えば吹奏楽は武生中学を始めとして、県内の中学は全国で何度も優秀な成績を収めている。本丸広場で練習して、通りがかる人が聞いてくれる。そういった場があると中学生にとっても励みになるはず。
- ・俳句や川柳も文化資源。例えば川柳は諸派があるが合同していた数少ない県の一つで、今でも人口が多い。俳句も五七五の定型詩と自由形式が一緒になって俳句会をやったという数少ない県。
- ・観光資源がある場所に、いい川柳や俳句がショーケースに入って飾ってあってもいい。いい俳句や川柳があれば入れ替える。そのように、文化全体を活気づけるといいうやり方があるのではないか。
- ・色んなものに亀裂が入ってなかなか残っていない中で、人がしっかり育ってきたというのが、教育県としての福井の強みではないか。

(下川委員)

- ・地域の景観づくりといったときに、今の自治会といった戦後にできた組織構成が現代に合わない。だから若いお母さんやお父さんは入りにくくなっている。子ども会もどんどん減っている。そういう意味で、しっかりとしたコーディネーターが入って、組織づくりからまたやり直して、みんなにもう一度がんばってもらえるような可能性は残されているのではないか。

2. 美しく持続可能な都市の実現

(1) 緑豊かな風格ある都市への再編

(小浦委員)

- ・まちは常に変化する。元気なまち、美しいまちは、まちで発生する変化をうまく調整したり、マネジメントする仕組みがある。変化を止めるような歴史の継承の仕方ではなく、いい変化をどう組み込んでいくのかというデザインが大事である。
- ・大きな城下町で県庁所在地になっている規模の都市は、都市機能を維持していくために近代化の中でどんどん変わっていった。それが今行き詰まってきて、どこでも同じように、これからどうするのかということに直面している。これから持続可能な開発、拡大成長に代わる元気を生み出す動きをどううまく生み出すかという方向性を示していくのが、このビジョンであり、そのための仕組みづくりが必要で、今すぐにやらないといけないことである。
- ・駅前状況、駅前広場や再開発、駅前線の延伸といった、今動いているものをどういう方向に向けて仕組んでいくのか、それが市民のみならず、地域の人々に見える形で伝え共有していくことが重要ではないか。
- ・これからの修復型、改善型、管理型の公共事業においては、小さい事業であっても、共通の意図を持ってデザインしていく、マネジメントすることが、緑豊かな風格ある都市を実現するにはとても重要だと思う。
- ・緑豊かということは、街路樹であったり、公園であったりというだけではなく、それぞれの民間のお庭であったり、通りに向かっての構え方が重要になる。歴史的には、通りに面して店があり庭は奥にあるといった暮らしが基本のまちなかの緑は、見えないものも多い。町全体として緑の豊かさを確保するときに、その配置や見え方は、必ずしも見えればよいというわけではない。それぞれのまちによっての緑のあり方があり、どういう配置をするかがデザインだと思う。
- ・大きなビジョンを持つとともに、一つ一つの動きや変化を、良い方向に持っていくということが都市のデザインといえる。

(国吉委員)

- ・50年先を目標にすることと、短期的にできることの両方がある。短期的にできること、ちょっとした工夫をやり続けることによって、本当の50年先のイメージに到達できる。
- ・代表的なのは駅前広場からお城との関係の作り方であり、車回しだけの話ではなく、福井駅前に降り立った方々の第一印象として、お城への見通しや期待感をどうやって作っていくかを是非工夫してほしい。あるいは、イベントなどが行いやすい空間をあらかじめつくっておくということも大事かと思う。

- ・県庁や県警本部は何年後に動くか分からないとしても、足元に何か工夫ができないか。歴史性を感じさせるショーケースみたいなものがボックスではめ込まれるというように、今の状況で歩いていても歴史が感じられるような仕掛けがあるとよい。公共からやることで、民間の既存のビルでも一階部分を少し開放的にしてくれないかということに対して、説得力が出てくる。
- ・今あるビルについては確かにまち並みが揃ってなくて、なんとかすべきだと思うが、まずはせめて低層部だけでも、緑があり、市民が近づける工夫をすべきではないか。フェニックスプラザも田原町の駅に対して全然開いていない。建物は一階が開放的になっていて、通りから中の活動が見えるだけでも、楽しさが出てくる。
- ・このような短期的な戦略を工夫しながら、福井らしい演出とはどんなものか、学んでいきつつ作っていくことが重要ではないか。

(小浦委員)

- ・将来像を模索するときには、トライアンドエラーをある程度続けることもあるかもしれないので、作りこまないで、修復やリノベーションで、小さな変化を埋め込んでいくという方法もあるかもしれない。
- ・人が住めることは大事。都心部は比較的地価が高く、マンションしか建たないというのがどこにでもある傾向。しかも、都心商業地は指定容積率が高く、ほとんど周辺との関係なく高層の分譲マンションが建つ。分譲型の開発は売り逃げできるので、地域との関係に責任を負わないことが多い。
- ・今、あまり開発が進まないことを良いことだと受け止めて、うまく、ゆっくり動かしていくような取り組みもあって良いのではないか。これまでのような何でも開発を促進すればよいというのではなく、次のまちの方向を見せていくような取り組みを積み重ねて、少しずつ変わっていく方法もあるのかなと思う。

(下川委員)

- ・現在、市民は、大名町交差点から城址に入ってきて、どこからかはけていく。今回、城址と中央公園は、一体のものとして考えている。どこからでも一体となった公園に入れて、ここを起点にいろんなところにはけていくという仕組みづくりができないかなと思う。
- ・また、公園に入ってくる人の流れを受けるところがない。面として受ける場所をつくって、そこが活動の場になっていくような仕組みづくりができないかなと思う。

(西村座長)

- ・県民会館跡地も中央公園と一体化させながらどう空間を改善していくかというのは正に今のタイミングである。そこに、市民やいろんな人たちの気持ちや希望が言え

たり、仕組みの提案ができたり、作業のプロセスが見えたりすると、もっと関心が高まると思う。それがある程度実現されていくと、都市に対する気持ちが随分違ってくる。

- ・ 県民会館跡地の作り方については、良いチャンスなので、今までのような基本設計があって、実施設計で誰かが受けてと行政的に進み、囲われていて何が出来るか分からなくて、出来たところでいいでしょというプロセスと少し違う市民の関わり方ができる、一つの実験場みたいにできるとよい。

(竹内委員)

- ・ 今日の都市模型を置いて、勝手にビルを動かして、子供がおもちゃで遊ぶような感覚で、道路、お店、広場などの置き換えが出来たり、遊びながら触れるような場があると、自分のまちを実感できてよいと思う。

(西村座長)

- ・ 欧米や、最近ではアジアでも、役所に模型が飾ってあるところが多い。サンフランシスコでは新しいプロジェクトは模型に置いてみて、まちに合うかどうか確かめる。その中で良いものを年間設定した上限の延べ床面積まで認めている。せっかく模型を作られたので、うまく生かすようなことを考えるとよい。我々も提言していきたい。

(2) 人や環境に優しい交通ネットワークの実現

(国吉委員)

- ・ 本日欠席の勝木さんは東西交通をもう少ししっかりと公共交通で担うべきだという意見を展開されていた。バスを中心とした横のつながりを、強化していきたい。しかしその中間のようなものもあるかもしれないといった議論があった。現在、コミュニティバスが割と成功しているということで、素晴らしいことだと思うが、その辺りも含めた、公共交通の問題が重要だろう。
- ・ 郊外の一戸建てを子世帯に譲って、高齢者が利便性の高い駅周辺に移り住み、コンパクト化しているということもある。高齢者にやさしいまちとして、マイカーを運転しないで生活できる空間を、少なくとも中心部においては実現することが重要になる。
- ・ 他の県からも、高齢者だけでなく、人に優しいまちとして福井に住んでみようと思われる。豊かな食文化もあり、そういう中でマイカーを持たなくても生活できるまちになれば、さらなる魅力が出て来るのではないか。

- ・福井鉄道の延伸が議論になっているが、やはりつなぐことが必要で、分かりやすく公共交通が結ばれた整ったまちとなる。
- ・駅前広場に結節し、東西方向などの新しいバスネットワークや、新しいバスに変わるシステムを導入するなど、どの都市も課題になっていることを、打ち上げる必要がある。駅前整備をしている今がチャンスではないか。

(小浦委員)

- ・冬に雪が多いことは空間の構成にも影響する。それぞれの地域の気候が都市空間のデザインを左右する要素として大きいと思ったことがある。

(西村座長)

- ・アンケートでも、明らかに雨や雪に対応した交通の乗り換えが、一番大きな課題として捉えられている。雨や雪に濡れないでうまく乗り換えできると優しい駅となる。
- ・北陸はそこが重要な課題であり、形として、電停のデザインなどに反映されていると、市民のニーズに答えていると感じられるのではないか。

(開発委員)

- ・LRTは東西を結びつけて、循環させるべきだと思う。循環させると、雪や雨にも対応でき、高齢者にも優しくなり、中心部にも来やすいのかなと思う。

(下川委員)

- ・中国の天童寺では、聖域に車が入ることはやはり許されない。しかし高齢の方々が山道を登ってはいくことはできないということで、EVを導入しており、ゴルフのカーットの9人乗りみたいなものだが、規則正しく運行している。
- ・EVをうまくまちなかに活用できれば、交通整理ができて、歩行者空間も有効につくりだせるのではないか。城址周辺の界限は、EVと歩行者のみにして、その周辺に駐車場をつくるという大胆な案があっても良いのではないか。

3. 自然を守り、緑や水と共生する都市の形成

(1) シンボルとしての足羽山、足羽川と緑がつながる空間の形成

(竹内委員)

- ・足羽山は、朝早くにジョギングしたり体操したりと多くの方が集まっている。その他は足羽川の桜と足羽山の桜は少し時期がずれるが、ほぼ同じ時期で、両方を一緒に見るとほんとにきれい。しかし1週間から2週間の間だけ。これからの季節に紅

葉がきれいじゃないのがすごく残念。

- ・里山とは人が手を入れて、人が使うようにしたもの。誰かが手入れをしないと荒れていき、桜も寿命が来れば枯れてしまい、紫陽花もダメになっていく。
- ・恩恵をあずかるためには、ただ毎日使うだけでなく、自分たちも山に何か返さないといけない。そういう知識が今ほとんどない。やはり愛着を持つための、仕掛けが必要である。
- ・まちなかは庭も小さく、何かの記念に好きな木を植えようと思っても場所がない。であれば、みんなの庭として山に市民の記念樹を植えていく。植えた人の名前がついていてもいい。長期計画をプロに立ててもらいながらやることで、50年後にはすばらしい足羽山になっているといいなと思う。
- ・足羽川の堤防も時々散歩をするが、犬の散歩、自転車など、皆さん上手につかっている。
- ・堤防の桜は枯れたら植えられなくなると聞いている。桜は大事なので、何か方法を考えて、緑豊かな雰囲気を維持できたらなと思う。
- ・川岸に住んでいる方が、紫陽花を植えたり、季節の花を植えたりして、桜が終わった後も結構楽しめる。そういった小さな毎日の生活の中で続けられる緑化をしていったらよいのではないかな。
- ・川原はススキのイメージが強い。秋だと季節を実感したり、ハツタケやクローバーを摘んで王冠みたいなものを作ったりした覚えがある。人が手をかける部分と、在来植生を大事した、自然に生えてきたものを上手に利用して、そんなに手がかからないようにする部分があるといった工夫ができたらいいなと思う。

(五百旗頭委員)

- ・都心だと子供があまりいないが、足羽山を取り巻く地域は15歳より下の人口が多い地域であり、足羽山、足羽川については子ども目線で考えるとよいのではないかな。
- ・観光客にとっては、福井駅から見て足羽山は外れの方にある山だが、子供たちから見ると自分たちが住んでいる真ん中にある公園山。子供の育ちという観点から足羽山は利用すべき。アスレチックや公園として、北陸一を目指すくらいの気持ちで、何回行こうが、一日中子供が遊びまわって、くたくたに疲れてぐっすり寝る。その顔を見て、福井に住んでよかった、福井に来てよかったと皆が確信できる、そういう山になればいいなと思う。
- ・やはり皆が守っていく山だと思うので、思いを持った子供たちが、何か自分たちもしたいと思えば、里山として守っていけるのではないかなと思う。

(西村座長)

- ・足羽山は夜暗すぎるのではないかな。生態系の事を考えると下手な事は言えないのか

もしれないが、茶屋もあるのに暗すぎてなかなか近づきにくい。

(下川委員)

- ・ワークショップでは、現在の足羽山の利用者は多くはないので、子どもを対象にして体験学習や散歩ができる「ビレッジ」として、山との接し方をどんどん日常化していく事が相応しいのではないかという意見が出ていた。
- ・足羽山の頂上に上ると、福井市の中心部を一望できる。まちを眺める場所として足羽山を考えるとよいのではないかという意見もあった。

(小浦委員)

- ・まちの中から足羽山を眺める良い場所がない。まちの中から見えないのであれば、山が見えるようにうまく歩かせる工夫が必要。

(下川委員)

- ・川があることもよく分からない。まちの中から音も聞こえない。

(西村座長)

- ・川が見えて山が見えるという意味では、浜町へ誘導することはとても重要。ここで福井の全体が感じられる。

(下川委員)

- ・ワークショップでは、山や川、歴史に対して、キーワードとしてゆったりとしたひと時を過ごすというイメージを持っていた。これは重要な視点かなと思う。

(西村座長)

- ・九十九橋のたもとが元々の都市の起点である。道標もあり、高札場もあった。物資が三国から来てここに上がったので、非常に重要な拠点だったと思うが、今は駅が反対側にできたので、一番遠いところになってしまった。ここの再整備はできないのかと思う。

(下川委員)

- ・ワークショップでは足羽山と足羽川をどう生かしていくかというグループが九十九橋近辺を対象にしていた。メンバーが若い世代の集まりだったので、北国街道の歴史的な経緯、半石半木の橋が架かっていた九十九橋、門があったとかという話は出てこなかった。若い世代は知らないのだろう。

(2) 文化と活動の空間として足羽山、足羽川の再生

(吉田委員)

- ・明治20年代の足羽川の写真では、家の川側は階段状の川戸になっていて、横井小楠は熊本に帰る時にここから船に乗って三国に下って帰っていたと記録がある。対岸には三岡八郎（由利公正）がおり、坂本龍馬が会いに行ったとき、坂本と小楠は川戸から降りて、船に乗って行った。
- ・川戸があって、水面が今と比べて随分高い位置にあり、水と近い姿であった。足羽川は河川改修で今の姿になっており、昔の姿に戻すことは絶対にできない。これを前提として、何らかの形で、昔こうであったということを偲べるように、記憶に留めていけないか。
- ・川岸の松の木は戦災、震災にも耐え、昭和のほんのこの間まで一本だけ残っていた。今回の堤防の改修で切られたのだと思う。それはもう戻せないが、若い人も含めて、高齢者もあまり知らない、感覚的に分からない記憶を伝えていくことが重要。
- ・小楠と三岡が経済政策、富国政策をやった要の産業会所は、九十九橋のたもとに川に面して、文久元年にできた。品物はここへ集まって、一度検められて三国へ運ばれる。ここは幕末、明治にかけて福井藩が金を儲けた中心の場所であった。
- ・産物会所の事を偲べるようなもの、あるいは、県内の産物を集めて販売できる簡単なものが、歴史的な意味の説明とともにあってもよい。
- ・当時は堤防とまちの間に道がなく、道ができるのは戦後。浜町など地域の人達にとっては、川とその景観まで含めて個人のものであった。熊谷市長が、堤防と川の間で緑地帯を設けるといって都市計画を作り、地域と川を切り離して公園にした。それも元には戻せないから、緑地化されている部分を、昔の姿を念頭に置きながら、地域の人達と連携できるような使い方があるとよい。
- ・桜橋や九十九橋で途切れる散歩道が、遊歩道としてつながっているとよい。
- ・簡単に川に降りて、川面で歴史を偲ぶことができるのとよい。三岡の旧邸はもう川の中だが、川岸から、ここが小楠の家で、この辺りを龍馬が舟で行き来して、ここで酒を飲んだという話が具体的にできれば、売りになるし、そんなに難しいことでもないのではないか。
- ・河川敷は、ススキやクローバーが生えていて、ほったらかしだった。河川敷だから水がつくのを前提に作っているためであり、これを恒常的に使おうというのは間違いではないか。自然な形で残しておき、そこを自由に利用していただくということだろう。ここに色んなこしらえものを作るといっては、結果的には何回かの洪水や水害があった時の事を考えると難しい話だと思う。
- ・桜の時期以外は、足羽川はきれいでなく、感動するようないところでない。川原も雑草が茂り放題で管理されていない。そういう時には、まず歴史的な意味で、九十九

橋のたもとまで含めて浜町にして、通る人に利用してもらえそうな環境ができる
とよい。

- ・足羽山は明治の終わりには福井市が公園として開発している。江戸時代からあった、古墳やら文化的な施設を壊しながら、近代的な公園を作り上げた。明治の人達も我々の子供の時代も、春には桜を見たり、山へ町内で行って運動会をやった。秋も同じ。山へ行くことそのものが行楽としての使い方をしていた。
- ・河川敷は、一時は師範学校の校庭になっており、順化小学校も一時期グラウンドに使っていた。
- ・百坂の麓の齋殿清水の水を使った白玉屋さんがあり、その店が繁盛しだしたというのが、明治10年代の夏が来たという記事。それが夜中の11時、12時までやっていた。福井の人間の夏の利用は夜。それは、越前の昼寝と違って、役所も含めてみんな2時間の昼寝をする。そのため夜が長かった。
- ・夏は昼が暑いので、今でも夜の利用を考えると、利用客は増えるではないか。しかしそれは地元の人間の話で、観光客をそれで呼べるかどうかは難しいとも思う。
- ・九十九橋の北側の門の脇は川戸になっていて、産業会所へは川から直接品物を出し入れできた。石垣は10段ほどしかなくて、川面からは非常に近く、親水性があり、水に近い形で利用していた。戻すことはできないけれど、川と生活がもう少し近いところに結びつく工夫ができないかと思う。

(五百旗頭委員)

- ・生産役所をつくる、サインや案内板を立てるというのもあり得るが、案内板だけではつまらない。説明をしてくれる人がいて、外から来た人がそういう人と出会って、面白い話が聞けて良かったと思えることが大事だと思う。
- ・ガイドできる人がどれだけ育っているかが、私が福井で興味を持っているところ。ヨーロッパのガイドは、聞き手に心地よく、聞き手の持ち時間に合わせて、その時間内で面白いことをリズムカルに話す。自分の郷土への思いや知識だけでなく、リズムカルにガイドしてくれる層が育つかどうかというのは、偲ぶ観光地の生死の分かれ目かなと思う。

(開発委員)

- ・開花亭を普請する時の写真では、ずっと川の水面が写っており、その向こうに足羽山が見えていた。ここに道路が通る前までは、まさに足羽山まで自分の風景というように、花鳥風月の全てがそこにあって、全部手に入れていた風景があったと思うが、堤防の背が高くなって、2階からしか川が望めなくなった。
- ・金沢の犀川では、今日は水が多いとか、流れが速いとか、雨が降っているとか音で分かるのだが、そういう語りかける川というのが非常に大事だなと思う。

Ⅲ. 推進方策

(国吉委員)

- ・これから実際に空間を作っていく際に、国、県、市、民間同士それぞれの主体が情熱的に一生懸命やればやるほど全体が混乱していくことというのがよくあること。普通にやっていると、ばらばらになる。ドイツやフランスのような古典的なまちみたいにならなくても、少しでもお互いが共有し、分かち合うことで、まちのトーンが出来てくる。
- ・境界の共通性や、ある一角は通りに沿って表情を変えようということを、議論して調整するシステムが大事。それを専門家が一方的に持ってくるのではなくて、地域の方も勉強して育て、組織に加わってくることが、最終的には個性をつくっていく。最初は大変だが、やり続けることで段々と育っていくと思う。
- ・姫路の駅前に交通広場ができるのだが、やはり車回し中心で歩行者の事を考えておらず、駅前からお城が見えないといったものが当初の設計案だったが、大学、市民の参加や提案、ワークショップ等を踏まえ、とうとう当初の案を変えた。100点になったかどうかはわからないが、変わってきたプロセスがあった。
- ・様々な主体でぶつかるのは当然。この機会に、地域の商業地の人も利用者の市民も意見を出す、ということをしてぶつかり合うなかで、地域としてどういう価値を選択していくかということ、やってみてもよいのではないか。
- ・その中から、建設的な関係が出来てきて、それが福井ならではの継続的なマネジメント組織、活動組織につながり、色んな事業に対して働きかけていく。それが一番重要かなと思う。
- ・横浜の場合も、横浜にこだわりのある地域の方々と協調してやってきた。最初はえらい子供っぽい提案だなと思っても、それに付き合っていくと地域の方も自分たちの案が実現してきた、ということで成長し、いわばプロ化する。無責任に提案するのではなくて、やったことに対して責任を持つようにもなってくる。地域なりのデザインコンセプトが、長らくやっていると素人っぽいものでも本物になっていく。
- ・横浜のようなよそから来る人が多いまちでもできている訳だから、福井は愛着を持つ市民もたくさんおり、そういう関係を築いていくのが重要ではないか。

(西村座長)

- ・横浜は地元の商業者の方はレベルが高い。でもそれも最初からではなくて、長い歴史のなかでそうになっていった。
- ・その意味では、最初は幼稚だと思われるかもしれないけれど、ちゃんと議論していく中で育っていくということであり、そういう仕組みが非常に重要。

(開発委員)

- ・今日の資料の推進方策に3つ掲げられているが、それに対して優先順位づけをせずにご提示いただいていることに、事務局の慧眼を見たと思う。
- ・この書かれている3つは全て大事なので、同時にやりながら、県民、市民レベルのコンセンサスをきちんと形成していくということが非常に重要でないかなと思う。
- ・『県内外からの英知を集める』ということでは、コンペをする上でのオリエンテーションが非常に重要である。どの軸で評価するかを明確に指し示して、その上でコンペをしないと、いいもの持って来いという形でだしても、それこそ東京から持ってきたものとかで終わってしまう。
- ・地域のコンセンサスを形成し、歴史の意図を辿って高度な次元で歴史を具象化すること。歴史を重要視しながらも、これからの未来をきちっと見据えたものにしていけるか、所謂変化に対応できるかどうか。非常に抽象的なことばかりだが、敢えてこういうことを行政側からきちっと明示して、それを踏まえて、きちんと仕事していただける、県内外からの英知を集めていただきたい。
- ・高度な次元というところで、地元の商工者としてやられたと思うのは金沢の鈴木大拙記念館。鈴木大拙という西崎幾多郎に並ぶ禅学者を取り上げるにあたり、生家の再現であるとか、書庫を披歴するのではなくて、水盤をつくって、そこが10分に1回空気で揺れる。そうすると水紋ができて周りの森の四季の景観がきれいに揺らめいて、儚さを感じる。
- ・この施設を作るためには解釈力も必要だし、これがOKだという行政側のオリエンテーションも必要で、地域のコンセンサスも必要。そういったものをきちんと併せ持って、ただ単に歴史だけにとどまらず未来志向でやるということ、デザインの中に投下できないかなと思うのが夢なので、是非ともお願いしたい。

(西村座長)

- ・今日いただいた意見は、基本的にはここに書いてあるアイデアをもう一歩二歩進めるものだったので、これがだめだという形のものはないかなと思う。
- ・少し事務局と相談させていただいて、取りまとめ、骨子案としての文言の整理をさせていただきたい。
- ・今後はそれを基にここでまた議論することになると思うが、当面の骨子案の取りまとめについては私に一任していただきたい。
- ・それを来月の県都デザインフォーラムで市民に私の方から議論の取りまとめということで、報告させていただき、フィードバックをもらって、最終案にしていきたい。